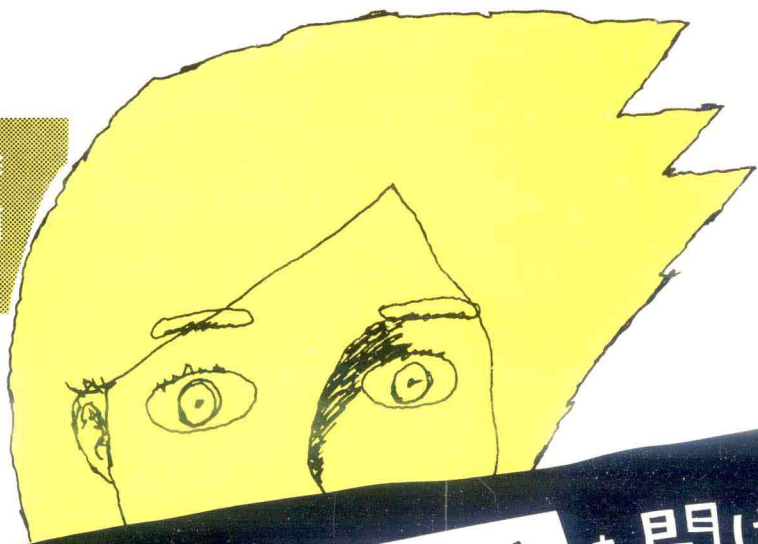


堀 直子 作
長谷川集平 画

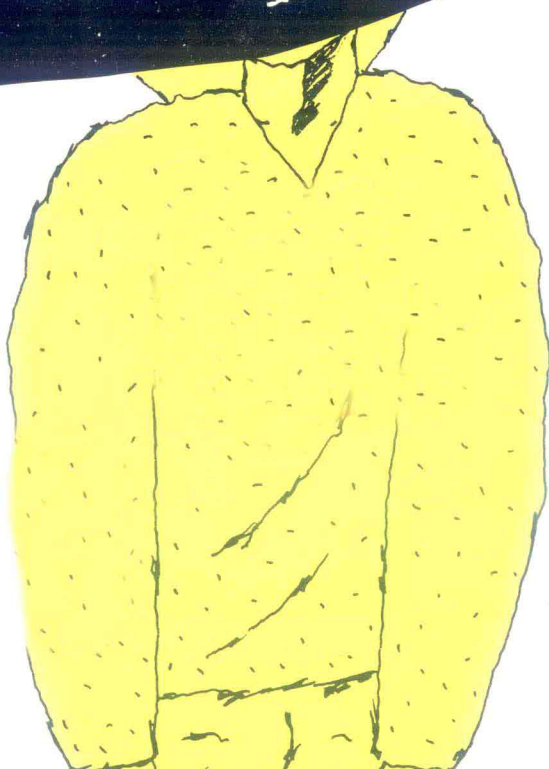
おれたちの **はばたき** を聞け



堀 直子 作
長谷川集平 画



おれたちの **はばたき** を聞け



おれたちのはばたきを聞け

昭和五十五年 六月二十日 第一刷発行

昭和五十七年十二月二十五日 第三刷発行

著 者―堀 直子 ©

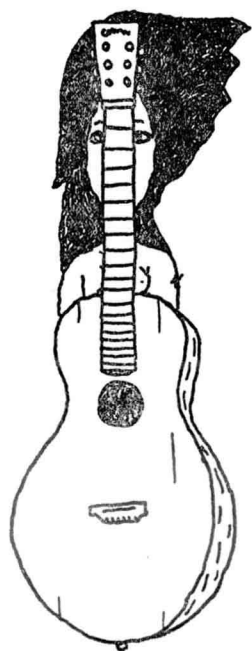
画 家―長谷川集平 ©

発行所―株式会社 童心社

東京都新宿区三栄町二二
電話〇三(三五七)四一八一

活 版―新興印刷製本株式会社
平 版―小宮山印刷株式会社
製 本―株式会社難波製本

もくじ



第一章	九月の風	7
第二章	しかられて	24
第三章	街角 ^{まちかど}	50
第四章	おれの夢	71
第五章	鬼 ^{おに} の家	93
第六章	悪い子	116
第七章	冬の唇 ^{くちびる}	138
第八章	飛ぶ	161
第九章	十二月のグッドバイ	180

あとがき 手さぐりの中から見つけるもの――

著者：堀 直子（ほり なおこ）

1953年7月高崎に生まれる。昭和女子大学文学部卒業。日本児童文学者協会会員。大学在学中から、現代に生きる思春期の少年少女たちの心の痛みを追いつづけた児童文学の創作にとりくんできた。一作目のこの作品で第14回日本児童文学者協会新人賞受賞。

画家：長谷川集平（はせがわ しゅうへい）

1955年4月姫路に生まれる。武蔵野美術大学中退。絵本「はせがわくんきらいや」で第3回創作えほん新人賞優秀賞受賞。「けんちゃんのおばけ」「トリゴラス」「とんぼとりの日々」「もしもしこちらライオン」「たくさんのお母さん」等、絵本やさし絵作品多数。

おれたちのはばたきを聞け



第一章 九月の風

その人のうわさが二年七組のシンの耳に流れてきたとき、シンは窓ぎわの席にふんぞり返って、ハッハッハッと笑いとばした。

それは、へんなうわさだった。その人は、足音をたてないで、教室に入ってきたとか。その人が教室に入ってきたとたん、空模様そらもようがくずれていやな雨がふってきたとか。その人の授業を受けたクラスの連中から、ひそひそとあやしく、けだるい風みたいにおし寄せてくるうわさ。

シンは、二学期が始まっではじめての国語の授業を、なかば好奇心こうきしんをこめて待った。午後からの授業をエスケープして、学校の裏手にある城趾しろあとへのぼりたい気持をおさえて、五時間目のチャイムが鳴るのを待った。シンはほんの少し緊張きんちやうして。

その人は、九月のはじめ、シンたちの通う葵中あおいへやってきたという。国語科のモモセが赤ん坊を産うむために、二学期いっぱい産休さんきゅうをとるのだ。そのモモセの代わりに、その人は二年二組からシンたち七組まで、六クラスの国語の授業を受け持つことになるのだった。

そう言えば、モモセは六月頃から、やけに太り始めたとしてシンは思っていた。

ヒステリックに叫ぶのがくせのモモセは、ときどきフー言って、授業のあいまに休けいをとった。とがったあごに肉がついて、髪をよけいに短くしたから、身体全体が姫だるまのようにふくれて見えた。

「あの、おなかは、ただごとじゃ、ありませんよ。」

シンは確信かくしんをもって、ピンクのジャンパースカートのもこつと厚ぼったい腹を観察してみた。

窓ぎわまどのシンの、ななめうしろのラーメン屋のせがれ、バレー部副キャプテンのテツが、中年太りかねえと首をかしげるたびに、シンはおおげさに笑いとばした。

「モモセさんは、冬休みに結婚したんだぜ。」

シンは、しまいにはいらだって言った。テツのトロさにあぎれた。図体ずうたいがでかいわりには貝みたいに小さいテツの耳たぶを引っばって、

——ほら、赤ん坊だよ。

こちょこちょ話したら、テツは信じられない顔をした。

おれだって信じられないよ。

——私は、学問ひとすじに生きてきました。みんなを一人でも、実力をもって、いい志望校へ進学させてあげるのが、私のつとめです。

なんて言ってたモモセだよ。結婚のけの字とも縁えんがなかった人がさ。三十五歳の青春かねえ。

二人のそばで腕組みして笑っていた、村上人形店むらかみの一人息子、チビのジュンペイが、

——だれだって、結婚すりゃあ、できるんだよ。

ポツンとおとなみたいにつぶやいた。

シンはジュンペイのことばをくり返しながら、日ましに大きくふくらんでいくモモセのおなかを見つめた。

第五時間目。

チャイムが鳴るよりも早く、教務主任のコウモンが青白い顔をつきだした。コウモンは数学の教師だ。はげあがった頭と白い髭ひげがテレビの「水戸黄門」に似ているからだ。

コウモンは、もったいぶってコホンと軽いせきをした。

「あんたかも知っているとは思いますが、モモセ先生が産休さんきゅうに入られたわけでして……。」

コウモンは、しわだらけの手で手まねきしてだれかを呼んだ。

「そこで、新しい代わりの先生に、国語の授業をお願いするわけでして……。」

シンは、コウモンのあとからずっと教室に入ってきた、若い女の人を見た。

そのとき日がかげった。黒板やカーテンに踊っていた日が、急にさみしい顔をしてどこかににげた。そら、おいでなすったぜ。シンは気持をしっかり落ちつけた。

シンは、海の底のように青っぽく暗くなった教室の中で、女の人の顔をぐいっとにらんだ。女の人の顔が、海の底に咲く不吉ふきつな花に見えた。まっ黒な長い髪は、あやしくひらめく海の藻もだ。大きく見開かれた目が、この教室を通りこしてどこか遠いものを見ている気がした。まっすぐ結んだ赤い

くちびる

唇はいじっぱりな感じで、人魚の子どものようにも、ひらひらと泳ぐ二尾の魚のようにも見えた。そう、ぬれてる感じた。しっとりと髪が、目が。面長のほったも水色のシャツも、ちょこんと身体の前で組んだ両手も。

コウモンは、パクパクかみあわせの悪い口をあけた。

えー、先生は、どこどこ大学のナントカ学部をストレートで卒業して、なになに学を専攻して、産休代替のベテラン先生である。以前の勤務先は、どこそこ中学で四か月、ナンダカ中学で三か月半であり……。

シンには、その人の学歴や職歴をまくしたてるコウモンのことばなんか、ひとつも耳に入らなかった。たった一つわかったことは、先生は、城趾の先のへしぐれ荘に下宿していらっしやると、しやべったことだ。

その人は、コウモンの長ったらしい紹介が終わると、赤い唇をゆっくり動かしした。

「有村れいです。よろしく。」

コウモンが、チョークで黒板に、有村れい先生と細長く書いた。

有村れいか。シンはノートの切れはしに、有村れい、有村……、ゆうそん……、れい……、れい……、と書いて、ああと心の底でつかい叫びをあげた。ゆう、れいか。名前まで不気味でやんの。

シンは、ゆうれい——と鉛筆で濃く書いて、二つ前の席のジュンペイにこっそりとさし出した。ジュンペイは指で小さくサインを示して、

——ふんいき、びったし。と、ささやいた。

— だろう？

シンは首をすくめて声を出さずにニタリと笑い、同じようにノートの切れはしを、うしろのテツに送った。テツはうつろな目で、紙きれの文字を読んだ。また、うつろな目を教壇きょうだんのその人にむけた。

— おい、テツ、ゆうれいだよ。あいつ、ゆ・う・れ・い。

シンは足ぶみして、とろいテツを納得なっとくさせようとした。ちり紙を丸めて、いいコントロールでテツの首すじにぶつけた。

— おい、テツ、有村れい、ゆ・う・れ・い、ゆうれいだよつ。

「こらっ、そこっ、風間信一かざましんいち、佐原哲夫さはらてつお、村上潤むらかみじゅん！」

コウモンの声が、とがって響ひびいた。

「おまえたち、何、やっとなるか、さっきから。私の目はフシ穴じゃないぞ。もっと気をひきしめなさいっ。」

コウモンは、きっかけを見つけたように、やたらといきどおった。

「それから、風間信一、なんだ、そのすわり方は。身体はまっすぐ前に、両足はきちんと机の下にそろえる！」

そのとき、風がまきおこった。シンは、ひえつと肩をすくめた。風は、校庭の砂ほこりを黄色くまきあげて、悲鳴ひめいをあげた。泣き女のように窓ガラスをたたき、窓じゅうの白いカーテンをつばさみたいに動かしした。

シンの目の中で、教壇のその人の姿がますます大きくふくれあがった。大きくなりすぎてパチッ

とはじけた。はじけたその人をじっとにらんだら、何がおかしいのか笑っていた。まっ白な歯だった。シンの耳の奥で、例の暗号が突然鳴り出した。耳の奥に、一匹のこびとを飼っているように、ときどきそいつが、おれに暗号を送ってくるのだ。ピロカンダラーと響く音のトーン。それが二、三回聞こえたあと、急にはげしくなり出す。耳が痛い。頭が重くなる。暗号があると必ず悪いことが起きる。必ずだ。おれは靈感人間だからな。百パーセント命中なのだ。これは魔の暗号だ。ああ、イヤな予感。

シンは、左の人さし指を左の耳の奥につっこんで、しょっぱい顔をした。

打ちつけの悪い廊下をふみしめながら、

「有村先生、びしびし授業やって下さいよ。夏休みボケを直さにや、いかんですからね。それでなくともこのクラスは、ボケナスが多いんだ。学進社のテストももうすぐなんですからね。」

特にシンの顔をにらみつけてコウモンが消えたあと、二年七組のクラスは、何だか自分たちとあまり年が変わらない若い女の人を迎えて、ちよつとウキウキしたのだった。

こんなときすぐ目立ちたがるのが、テツや、シンと同じギター同好会の西本マコの、悪いくせだった。マコやテツは、他のクラスから流れてきたその人に関するへんなうわさなんか、まるつきり信じてないふうで、明るく元気がよかった。

「センセエ、年、いくつ？」とか、「家族構成は？」とか、一番興味深いこと、「センセエ、結婚してんの？ してなかったら、恋人、いるう？ ちゃんと証明すること。」

おしゃべりなマコがにやにやして聞いた。

「センセ。上から順に身体のサイズを。」

テツがそうはりあげたとき、クラス中がわっとどよめいた。イヤラシイとマコが叫んだ。笑いのうずがその人をつつんだ。

その人は、髪をさわさわゆらすと、

「そんなに、いっぺんに聞かれたって、答えられないからね……。」

威勢よくハイと手をあげて、第一の質問をしたのがテツだった。

「年は？」

「二百三十歳。」

その人は、そっけなく答えた。みんなは顔を見あわせた。シンは、二十三歳のくせにカッコつけやがって、と思った。

「恋人は？」

マコが聞いた。

「いるよ。」

その人は、照れたようすもなく言っていた。

「だれ？」

「鬼。」

「……オニ？ オニって、名字？」

「ちがうよ。」

「じゃあ、オニってあの鬼？」

ジュンペイが叫んだ。

「そう。」

「うそだあ——。」

マコが、二重ふたえの目をまん丸くした。

「じゃあ、そんなら、その鬼の名前は？」

マコはむきになって、その人になたみかけた。

「一条いちじょうもどる。」

——ヒヤッ、ヒヤッヒヤッヒヤッ。

シンはそっくり返って笑った。へーんな名前だ。いかにもブ男おとこげな名前だ。シンは机をたたいて、こぶしでたたいて、ひとりで笑いつづけた。

「風間かまシン。そんなに、おかしいか？」

その人は、けっこう声が太かった。

チェッ。もう、おれの名前、覚えてやんの。チェッ。おれの名前、呼びすてにしないで下さい。シンは二回舌打ちした。心臓がどきっと鳴った。

「よし、それなら、話してあげよう。」

あいつはしーんとしたクラスの連中にむかって、重々おもおもしい声を響ひびかせた。

「ある春の宵よいのこと。源頼光みなもとのかみの命をうけて、四天王してんのうのひとり、渡辺綱わたなべのつなが、鬼がすむといううわさ